

# 知恵の樹

No. 135 2008. 12. 17

町田の図書館活動を

すすめる会

事務局：町田市森野3-1-12 増山方  
〒194-0022 FAX 042-722-1243

## Let's Read Project はじまる

— 和光大学附属梅根記念図書館の試み —

沢里 冬子



だいぶ前から学生は本を読まなくなった、さらに今では大人も本を読まなくなったと言われていました。今まで図書館は、本は読まれることを当たり前として貸出冊数を増やしたり、購入希望を受付けたり、所蔵していない資料の取り寄せを可能にしたりさまざまなサービスを提供してきました。けれどこのようなしくみだけで“本を読まなくなった”状況にアプローチできているのでしょうか？

図書館として、学生が本を読む習慣を身につけるために、何ができるのかと考え始めたのが5年くらい前からです。教員が勧める3冊の本を集めて、“本を読もう！”という小冊子を発行し、本の形や作りから本に親しむ製本講座を開催するなど、従来の視点とは違う取り組みにチャレンジしてきました。

そして2008年の夏に始まったのが、読書や本にまつわる活動を学生と図書館とが一緒につくり楽しむ「Let's Read Project」です。

第一弾の企画は、「選書ツアーに行って、図書館にお気に入りの本棚を作る」です。夏休み前に学生メンバーを募集し、集まった10名ほどの学生と図書館スタッフで「選書ツアー」を初体験。秋になって選んできた本に、手作りの「おすすめ」ポップや帯をつけ、「お気に入りの本棚」をつくりました。2回のツアー実施で選んだ本約150冊が、週替わりで並べられます。選んだ本を介してほかの人とつながる試みとして本を借りた人に感想をひとこと記入してもらうためのカードが添えられています。本に貼ってあるロゴシールや、ポップ、帯、カバー、本棚の公開を知らせるポスターなども、学生たちが工夫を凝らして作りました。図書館のホームページ(<http://www.wako.ac.jp/library>)を見てくださ

い、なかなかの出来ばえです。興味津々で公開初日を迎え、貸出第一号に一喜一憂しましたが、その後貸出も増え、あいた書棚に本を補充する作業も必要になりました。この取り組みでは、本を選ぶこと、人に勧めること、見せること、そしてお気に入りの本棚を作り上げることを通して、自分だけの世界から、周りの人たちとのかかわりへも視野が広がってゆき、メンバーのまとまりも、スタッフとのコミュニケーションもできてきました。

第二弾の企画は、「他大学との交流」です。数年前からさまざまな活動を展開している、フェリス女学院大学図書館の読書運動プロジェクトとの交流です。トークライブ“きっかけは一冊の本”一本と学生と図書館とー(12月6日)を実施。フェリスと和光の教員によるトークライブと、学生たちによる活動の紹介や、意見交換を行いました。図書館間の交流は今でもありましたが、図書館と学生も含めた交流は初めての経験で、学生と図書館のかかわり方をあらためて考える機会になりました。

さて、これからはどんな広がりを見せるのでしょうか。はじめは、図書館スタッフの働きかけで動きだしましたが、数か月を経て学生メンバーたちのミーティングでは、「同人誌を作ろう」、「文庫100冊選」、「和光大学生が本の紹介を投稿できるサイトをつくりたい」・・・etc. 新たな活動のアイデアが続々登場してきています。第三弾の企画「選書ツアーに行って、新入生におすすめの本棚をつくる」も具体的になってきました。図書館スタッフがカウンターを飛び出して学生のかたわらに立ち、共に本のこと、学生のこと、図書館のことを考え、創り出して行こうというこの活動に、乞うご期待！

(町田市図書館協議会委員)

# 都立図書館はどう変わろうとしているのか！ — 「都立図書館改革」の行方 —

いま、都立図書館が急激に変貌しようとしています。発端は6年前の「あり検報告」ですが、館長連絡会等に出席して把握している限りの現状をご報告します。

(町田市立図書館長・守谷信二)

## 1. 「都立図書館改革」とは

2002年1月、唐突に公表された「今後の都立図書館のあり方～社会経済の変化に対応した新たな都民サービスの向上を目指して」(都立図書館あり方検討委員会報告、通称「あり検報告」)は、それまでの都立図書館の運営方針を大転換する「歴史的な報告書」といえるものです。そうした報告書を都立図書館がまとめた背景には、当時の都の逼迫した財政状況があるわけですが、内容を大雑把に言えば、これまでの中央・多摩・日比谷の都立3館体制を見直し、広尾にある中央図書館を中心とする来館者重視型の図書館に移行しようとするものです。その結果、都道府県立図書館の責務であるはずの区市町村立図書館へのバックアップ機能(協力貸出等)が大幅に後退することが危惧され、当時多摩地域でも市民や図書館職員による大きな反対運動が展開されました。都議会に見直しを求める請願も出されましたが、残念ながら継続審議＝実質的な不採択になってしまいました。

その後、2005年8月には、「都立図書館改革の基本的方向」(第二次都立図書館あり方検討委員会報告、「第2次あり検」)も出され、さらに2006年8月に「都立図書館改革の基本的方向」(以上、いずれも全文は都立図書館のHP「都立図書館について」の頁から閲覧可)も公表されて、来年度中には一連の「改革」の検討を終えたい、というのが都立図書館の意向です。

## 2. 何が、どうなるのか

都立図書館のHPで上記「報告」類の本文をみても、具体的に何がどう変わるのか読み取るのは、なかなか難しいかもしれません。現在、提案または進行している主なものは次のようなことです。

### (1) 中央図書館のリニューアル

レファレンス機能の効率化、重点的情報サービス(都市・東京情報)に向けて改修工事中。1月4日リニューアル開館。

### (2) 都立多摩図書館が「東京マガジンバンク」へ

都立多摩図書館(立川市)は、来年5月から都立図書館の雑誌を一括収蔵する「東京マガジンバンク」と児童・青少年サービスに特化します。その結果、多摩地域に関する資料も、中央図書館に移されます。

### (3) 日比谷図書館の千代田区への移管

来年3月31日をもって閉館し、補修工事などののち7月に千代田区へ資料(16ミリフィルム除く)とともに移管。移管に伴う協定内容などは、都立のHPに公開されています。

### (4) 区市町村図書館への「改革の具体的方策」の提示

7月11日の館長連絡会(都立が主催する区市町村立図書館長の連絡組織)の幹事会に、「『都立図書館改革の具体的方策』における相互貸借の促進と協力貸出の見直しについて(案)」という文書が示されました。内容は主として次の4点です。

- ① 区市町村で持っていない本は、最初に都立に協力貸出を依頼するのではなく、まず区市町村間の相互協力で対応して欲しい。
- ② 都立からの協力貸出本は、原則として借受館(区市町村)で館内閲覧にする。また、特定の雑誌は協

力貸出対象外にする。

- ③ 都立の資料運搬車の費用負担・方法の見直し。現在、週に1回の都立の資料搬送車の経費を一部負担してほしい。
- ④ 都立の書庫も一杯なので、区市町村と分担収集等を協議したい。

### 3. 何が問題か

当面、先の(4)の内容が問題です。以下に問題の要点のみを指摘します。

#### ①について

利用する市民にとっては、リクエストした本が都立であろうとどこの市の本であろうと、手許に届けば用は足りるわけですから大した問題ではないようですが、実は重要な問題を孕んでいます。基礎自治体としての区市町村の図書館が所蔵していない本は、まず都立図書館へ依頼して借り出すというのはごく当たり前のことで、それが広域自治体としての都立図書館の役割です。その上で、都立にないものを同じ基礎自治体同士で貸し借りする。そうでないと、蔵書規模の大きな図書館にいつも借りなければならない小さな図書館は、なんとなく肩身の狭い思いをするというような嫌な話になるのです。

#### ②について

国会図書館と同じように都立から借用した本も館内閲覧となると、利用者には大変不便です。また、「特定の雑誌」(具体的内容は不明)が借用さえできなくなると影響は甚大です。

#### ③について

どこの区市町村でも資料費を切り詰めざるを得ない状況の中で、新たな経費負担など不可能です。

#### ④について

協議についてはやぶさかでないが、どのようなことを想定しているのか見えません。

### 4. 館長会の対応など

こうした都立図書館の動きに対して、これまで多摩地域の館長会をはじめさまざまなレベルで見直しを求める要望を都立に提出してきました。(4)の提案に対しても、11月14日の館長連絡会に多摩地域・23区双方の館長会の見解を出して、都側と話し合いがもたれました。多摩地域は、実際に協力事務を担当している各市の職員で構成する協力事務担当者会(館長会の下部組織・八王子市の館長さんが会長)で都立側の提案を検討し、見解をA4、6枚にまとめ、さらに各市から出された個別の意見もA4、24枚に集約し、それを多摩地域の館長会の正式な見解として都立に提出しました。

内容は、提案の問題点を具体的に指摘し、「公共図書館の任務と目標」などを引用しつつ、都立が都道府県立としての役割を改めて自覚し、区市町村へのバックアップに力を注ぐべきことを、強く求める内容です。(23区側はA4、2枚の「要望」と「質問事項」1枚。多摩地域とは条件が異なるとはいえ、館長連絡会でも区部の館長さんからはほとんど発言がありません。どうなっているのでしょうか。)

この問題は、来年1月から2月に掛けて改めて館長連絡会に、都側から第2次提案があることになっていますが、それまでの間に実質的にどう現状を担保するのか、その方策を探る必要があります。

市民の皆さんへの情報提供が不十分なことを私たちも反省しなければなりません、分からない点やご意見等がありましたら、各自治体の図書館や都立図書館(都立中央図書館管理部企画経営課)に直接お寄せいただければと思います。

因みに、市町村立図書館長協議会では来年2月の多摩地域の図書館大会で、これからの多摩の図書館の連携協力や資料保存をテーマとするシンポジウムを計画しています。2月12日(木)に国分寺市で開催される予定です。年明けにチラシなどでお知らせいたしますので、ぜひご参加ください。

## 報告 第13回 学校図書館のつどい”に参加して

今年で13回目を迎える「日本子どもの本研究会」・「親子読書・地域文庫全国連絡会」共催による「学校図書館のつどい」は、12月6日(土)10時半より国立オリンピック青少年センターで開かれた。遠く岡山などからの参加もあり、120名の盛況となった。午前中は福田誠治氏(都留文科大学)による「フィンランド教育 — 読解力と図書館」の講演、午後は三島市から小学校司書教諭と学校司書による実践報告および交流会があり、活発な意見交換が行われた。残念ながらほとんどメモを取ることができなかったため、やや主観的な報告となることをご了承ください。(水越規容子)

福田誠治氏

### フィンランド教育 — 読解力と図書館

OECDによる国際学力調査(PISA)の結果については00年から3年おきに3回実施され、その都度日本の子ども達の「学力低下」— というよりは「順位低下」がマスコミなどで大きく取り上げられ、今ではもうすっかりお馴染みとなった気がする。文科省などもこの結果には一喜一憂しているようで、いろいろと対策を練ってはいるようなのだが、肝心のフィンランド(総合で1位となっている)の成し遂げた教育改革の中身を見誤っているとしか思えない(大人に読解力がない!?)迷走ぶりだ。特にようやく根付きかけてきたかと思われる「総合的な学習」を削る指導要綱の改訂には首を傾げたくなる。

#### PISA 調査がめざすもの

ここで注意しておきたいことは、PISA 調査とはそもそも、子ども達のどのような能力を推し量ろうとしているのか、またそれはどのような目的から生れてきたものなのかということだ。また同じような国際学力調査に「国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)」があり(14日付けの朝日新聞に、TIMSS での高得点国ほど数学嫌いが多いとの記事が載っていたが)、この調査と PISA とはどのように違うのかも疑問としてある。今回の福田氏の講演は、それらをきちんと把握し結果について考えようとする時に、格好の示唆を与えてくれるものとなった。そしてこれは図らずも、アメリカが主導してきた新自由主義的な考え方や、ヨーロッパなどに見られる反新自由主義的な考え方との教育分野における拮抗を呈するものとなっているとも思えるのだ。

PISA は OECD がアメリカに対抗して生き残るために、「明日の市民」を育成するに従来型の(あるいは

英米型の)競争型学力ではなく、創造性や批判的思考を育てる協力型学力の必要性を認識し2000年から始まった。目指したものは「学んだことを測る」テストではなく「社会に出てどのように対応できるかを測る」テスト。そのためにはリテラシー能力が重要だと位置づけた。これはPISAの過去問をご覧いただければ一目瞭然で、日本的な教育(詰め込み型・暗記型)ではとても太刀打ちできない「難問」が並んでいる。

たとえばすっかり有名になった「落書き」に関する正反対の二つの意見を読ませた上での設問(国立教育政策研究所『生きるための知識と技能』P67~72)。特にその2問目、広告を例に、落書きは「合法的な一形態」と論じる意見は、いけないこととして教えられていることから受け入れられないためか、日本の生徒は無回答が他に比べ際立って高い。反対にアメリカは誤答・正答ともに半々で、自己主張の強さが伺える。

これらから予想されることは、日本は単に自分の意見を述べる能力の不足に留まらず、自分とは異なった意見を理解する能力に乏しいのではないかということだ。OECD がまさにこれからの子ども達につけなければならぬと考えた能力こそがそれ、つまり異なる歴史的背景や文化を持った人々と、言語や民族や宗教の違いを超えて理解し合い協力関係を築き上げていく、同じ職場で働いていく能力であることを考えると、結局日本の子ども達の結果は、その教育が目指すところを表現しているだけとも思えてくる。

#### 勉強意欲を低下させる日本の教育

また福田氏が強調したことに、日本では勉強が実生活に密着していないため、あるいはそうした教え方をしていないため、子ども達が勉強に楽しさを見出せないまま競争に追いまくられ、結果、高学年になれば

なるほど勉強意欲が低下してしまっているということがある。自分が学んでいることが将来どんな場面でのどのように役に立つのかをまったく想像できないまま、ただ教え込まれても、それは定着しないだろう。子ども達に確かな学力をつけるには、競争ではなく、楽しさを感じさせること。「好きこそもの上手なれ」のことわざ通り、楽しければ放っておいても自分から勉強するものだ。

### 学校間格差、社会的・経済的格差を埋める

この辺はフィンランドは徹底していて、ある意味すべて自己責任。勉強するも、勉強しないで将来困っても、それは本人の責任と突き放す。他のことをしていても、他人に迷惑にならない限りは放っておかれる。しかし同時にできない人には徹底的に援助する。さまざまな補習がなされていて、遅進児を小グループや時には一人で、特別支援教師の特別授業が行われる。生徒の底上げとできない子を徹底的に援助したことで、学校間や生徒間での学力差を驚くほど縮めているのだ。特筆すべきは社会的背景による学力差が極めて小さいことで、教育制度がすべての生徒に均等の機会を与えることに見事に成功している。これは今の日本が先ず第一に学ばなければならない点と言える。なぜなら今の日本は、親の社会的なステータスが子どもの将来を決めてしまう、凝り固まった階層社会に確実に変わりつつあるのだから。

### 読解力向上対策・図書館充実の動き

読書と子どもとの関係で言えば、フィンランドとて若者の読書離れの傾向はあるようだが、違いはその明確な政策にある。国を挙げて読書読書と音頭とりをするなど愚の骨頂、フィンランドはとにもかくにも図書館の充実を徹底して行った。よく比較されることではあるが、同程度の人口の市で、日本の約4倍ほどの公立図書館があり、当然子ども達の図書館利用頻度は日本の約3倍と高い。また趣味としての読書の時間も、総じて日本の2倍以上になる。もちろん親の労働条件の違いや、冬が長く屋内で過ごすことが多い環境も影響しているだろう。

気になることは、日本やアメリカでは読書量の多さがそのまま読解力の得点に結びつかない点であろう。ある程度までは読書量が読解力に結びつくのだが、一定程度以上になると伸び悩み、あるいはマイナスに転

じるのだ。フィンランドではどんどん伸びていくのに、である。これは読書の仕方や内容によるものなのかもしれないが、さらに詳しい分析がほしいところといえる。

以上簡単に福田氏の講演をおさらいした。そのあと昼休みを挟んで三島市の実践報告があり、けて雇用条件がいいとは言えない中で(もちろん町田の比ではないが)、およそ9年間で専任司書全校配置を成し遂げている。また学校司書待遇改善のために教員が積極的に発言し、教員・司書共同の勉強会をつくって連携を深めるなどの取り組みがされている点も、とても羨ましいと思う。

その後交流会が持たれ、「文科省図書標準を満たすために、あまり廃棄はしないように言われている」といった悩み(今時このような指示があるとは信じがたいが)や、「学校図書館での子どもの読書の自由はどう守られねばならないのか」という重要な問題、また杉並区での専任司書配置を求める活発な活動報告など、次々と意見や質問がなされ、大変有意義な時間となった。以前に比べると、単なる情報交換や催し物のお知らせではなく意見交流が行われるようになったのは、各地で学校司書配置が進み、現場での悩みや求めることが重なり合ってきたからなのではないかとも思える。

このように得るところの多い会であるのに、町田からの参加が一人だけだったのはなんとも寂しい限りだ。各地での状況を聞くにつけ、町田での停滞、というより後退が悔やまれる。外への参加が明らかに減っているのは、それだけ図書指導員が疲弊してきているからなのではないだろうか??

### 町田の学校図書館を考える会 12月例会

13日(土) 10:30~12:30

市川・清水・谷釜・伴・増山・水越

### 議題

- ・学校図書館に「司書」をの要望書作成について
- ・学校図書館に関心を持ってもらうための講演会企画について
- ・市内の学校図書館見学について

1月定例会/会員の皆さま、ぜひご参加下さい!

10日(土) 10:30~ 公民館フリースペースで



## 新刊紹介

## 田井郁久雄/著『図書館の基本を求めて』II

(大学教育出版 2008.11/1575 円)

当会報 129 号で紹介した田井氏の著作の続編が出版された。2008 年1月に出版された『図書館の基本を求めて』(I)は、個人誌「風」「三角点」に2001年から2003年まで載せた文章を収録してあったが、今回のIIでは同誌の2004年から2006年までの文章が収録されている。Iは当時話題となった、ベストセラー複本購入問題や、選書ツアーなどが取り上げられていたが、IIではその後問題となった図書館の自動化(自動貸出、返却機)やビジネス支援についての問題点を鋭く指摘された。しかし、IとII共通に流れる問題は、公共図書館の業務委託・指定管理を巡る問題である。

田井氏は、各地の図書館へ自ら出かけて行って見学し、特にマスコミや図書館界で話題となっている図書館については、果たして公共図書館として本当に評価できるのか?見過ごされている問題は無いのか?厳しい目で確認をされる。公共図書館問題についての論評においては、具体的な論証が備わり、また公共図書館職員としての豊富な経験によって裏付けられ、公共図書館問題について議論すべき点を整理しながら、私達に提示してくれる。田井氏は本書のあとがきで図書館界やマスコミが目新しいことにばかり関心を向けるものの、すぐにその話題を忘れて次の新しい話題に気をとられる点について「このような移り気は図書館の本来の性格や役割にはそぐわず、図書館の理念と長期的な視野にもとづいた地道で着実は発展を妨げるだけである。」と批判され、ご自身の文章はその時々々の現実の図書館事例や研究者・図書館関係者の発言を紹介し論評することで、後年これらの事例がどの様に評価されるのか冷静に検証するための資料として、また「図書館のあり方を考えるささやかな記録」となればと言われる。

しかし田井氏の論評は「ささやかな記録」などではない。図書館、とりわけ公共図書館関係者や利用者にとって、現状をどの様に考えるのか?と問題を投げかけている。図書館に関心のある人は、是非、IとIIの両書を読んで欲しい。21世紀に入って、公共図書館がどうなってしまったのか、何が問題なのか?特に委託問題や指定管理問題についての指摘は利用者にも切実

であるが、一般の利用者にはちょっと分かりにくい公共図書館を巡る問題が明らかになるであろう。しかも事態は利用者＝市民の知らないうちに進行する。田井氏の論著は「警鐘」であり、図書館を考える上での「灯台」である。

公共図書館は、利用者＝市民＝民主主義の主権者の「知る権利」を社会的仕組み(法的根拠、公費支弁)によって保障し、民主主義を支えているといえよう。この考え方は近代市民社会が成立し、同時に公共図書館が誕生して以来、幾多の先人達によって育まれてきた考え方である。

なぜ、「公共図書館」なのか?なぜ必要なのか?今一度、利用者である我々市民も公共図書館の本質を考えるべきであろう。そのためにも田井氏の論著をお薦めする。(山口 洋:会員)

### 授業で出会った学生たち ⑦

#### 身近な学生の素顔

山本 宣親

「先生、何かお手伝いすることありますか?」。最初の授業終了後、ひとりの女学生の申し出を受けることにした。そして講師控え室に男子学生ふたりを連れてやってきた。私は書類の整理やコピーを頼み、手際よく作業している彼らと会話しながらお茶の準備を始めた。作業が終わり彼らとお茶をしながら雑談をした。こんな機会は得がたく有難いもの。以降、授業が終わると決まってこの作業が続き、彼らの都合がつかない場合は、別の学生にバトンタッチされた。

とかく「今の学生は」と批判されることが多く、私もこのシリーズで辛らつな批判を書いてきた。しかし、そうばかりでないことを彼らに教えられた。さらに学生との交流から、私たちの頃とは違う苦労があることも知った。

特に就職活動に難儀しており、正規雇用に就くことが難しい。女子学生は試験を受けさせてもらえないことも多いとか…。私たちは「学生」を全体的に見るのではなく、個々を見ていかなければと思う。今の時代は「量」ではなく「質」が求められている。彼らに機会が与えられることを願うばかりである。

# 全校生徒が語り手—文化祭は昔語り&創作劇 見学記



「子どもたち全員がそれぞれ覚えた昔話を毎年親や地域の人たちに語って聞かせるのが昭和小学校の文化祭なんだわ」と渡部豊子さんからお聞きして興味がわいた。渡部さんは、10年ほど前より毎週木曜日その学校に出かけ、幼い頃より祖母から聞いた昔話を子どもたちに語るボランティアをしている。渡部さんの語りを聴くうちに自分も語りたいたいという子どもが出てきて、方言などをアドバイスしてい



るうちに全校児童が語る基盤が出来、文化祭へと繋がっていったようである。

10月24日(金)秋の日の午後、山形県新庄市にある昭和小学校体育館で行われたこの文化祭に出かけてみた。子どもたちの絵画や工作が展示された廊下の突き当たりに広い体育館があり、パイプ椅子が並べられ、前の方に全校生徒20人が既に腰をかけており、家族や地域の人たちが普段着でつぎつぎと集ってきた。



観客席にしっかり顔を向けてははっきりとした言葉で(メモなども見ず)5年生の女の子が始まりの挨拶をし、児童代表の2名[1年生女子(写真①)と6年生男子]がそれぞれ壇上で、手作りの屏風を背に新庄の民話「金の茶釜」、「かめと大蛇の戦い」をテンポ良く堂々と語った。そのあと、異年齢が4班(5人ずつ)に分かれての全員の発表が、体育館と隣の活性化センターの2箇所に分れて始まった(写真②)。参観者も、わが子や孫の語りを聞くため場所を移動する。子どもたちは、語り手としても聞き手としても真剣そのもので、会場は語



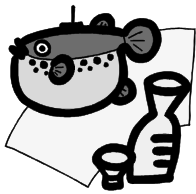
る声と時たま起こる笑い声と語り手への拍手が交錯しなんと心地よい空間を醸し出していた。その後また全体育館に集り、渡部さんの語り「三井寺④鐘の由来」(龍の子太郎の原話のような話)、他を聞く(写真③)。

昔話には、何らかのメッセージがこめられていて、それが説教臭くなくス〜と体の中に入ってくる。こうした語りを毎週聞くことが出来る子どもたちは、なんて幸せなんだろう。また聴くだけでなく語り手としてお話に取り組むということは、結果的に語彙を増やし、想像力を高めてお話を深く理解し、相手に楽しんでもらおうという優しい思いやりが育ってくる。

最後は、創作劇「昭和開拓物語 2008」。昭和初期に開拓されたこの村には学校がなく、長い道のりを分校に通い続けていたが、自分たちの村に昭和小学校が出来るまでの子どもたちの物語を全員参加で演じた(写真④)。かつて更生保護関係のボランティアをしている時、人間が生きていくためには、自分が拠って立つところ、アイデンティティがなければならぬということを学んだが、正に、昭和小学校の子どもたちは、しっかりと大地に根を張って生きているということを感じた。

文化祭が終わって、校長室でお茶をいただいていると、下校する子どもたちが次々と校長室に顔を覗かせ「さようなら!」と挨拶をしていく。客が居るからではなく、毎日のことだそう。

話を交わす時、どの子もしっかりと相手の目を見て、自分の言葉で臆せずものを言う。勿論いじめや登校拒否などは皆無。全校生徒20人だから、こうした取り組みが出来るといえばそれまでだが、人間としてどう生きていけばよいかの知恵が濃縮されて詰まっている昔話を、魂が宿るといわれている肉声で、互いの息遣いとまなざしを交わしながら語り合う場があるということは、それだけで、世の中明るい方向にむかうのではと、少々短絡的かもしれないが確信が持てた昭和小学校文化祭だった。(増山 正子)



# ひろば

<11月例会報告> 19日(水)  
16:30~会報印刷  
18:00~20:30 例会  
於・中央図書館中集会室

出席/伊藤 片岡 斎川 島尻 辻 前島  
増山 桃澤 山口洋 水越(中途退出)

開会まえに守谷氏、手嶋氏がちょっとだけ顔を出され、所要のため欠席を告げる。

●**会報について**・・・今の図書館の最先端を行っているのはどこか?どんなサービスを、どのようなスタイルで打ち出しているのか?今の滞在型図書館とはどんなのか、公共図書館と学校とがうまく連携しているところはどこ? そういったことが知りたい/ 町田は、市立図書館が全学校への配本を実施しているが、そのサービスについて取り上げて欲しい。

## ●講演会について

・例年通り、広瀬さんに、この1年の新刊子どもの本の紹介をお願いします。

・田井郁久雄さんが『図書館の基本を求めて II』を出された(P6参照)。是非、また田井さんのお話を聴きたい。田井氏は全国の図書館を見学して歩いている。こちら方面に見えられたときを利用し町田で講演会をやってほしいよう働きかける。

・町田の学校図書館を考える会とすすめる会と協同で講演会を開けないか?

●**本の紹介**・・・『地域に図書館はありますか?』身近に図書館がほしい福岡市民の会・編(石風社 ¥1,200)。編者の会報「お〜い図書館!」から項目

(1. 図書館のある暮らし、2. 地域と図書館、3. 図書館はどうなるの?) 毎に整理して抜粋し掲載、日常の活動の重みが伝わってくる。是非ご一読を!

●**会のリーフレット**・・・若い人のセンスが光るイラスト入り(囑託さんによる)がたたき台に。文字部分の掲載内容をシンプルにこのことで更に検討。次回、活動内容(増山)、これまでの歩み(桃沢)、のたたき台を作ってくる。

●**近況報告**/成瀬センターが耐震設備のための改装工事に入る。かえで文庫も関係しているので今夜の集会に出てもらっているが、センターの利用者が多くの要求を出している。センターで図書館の本の受け取りができるようになればいいのだが。

・図書館は各センターに協力してもらって、リクエストした本の受け取りが出来るよう検討中とのこと。

2008年度 第9回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

1月15日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

## プログラム

町田の作家「北村透谷」の作品から 小林  
「魔法使いの居る街」(別役実作) 小泉  
「つるかめ」(日本の昔話) 梅谷  
「ちっちゃなごきぶりのべっぴんさん」(イソ) 丸岡  
<語り:まちな語り手の会>直接会場へ! 保育申込



・流山市の指定管理図書館を見学した山口さんより、大量の資料とともにNPOによる指定管理の実態についてレポートをしてくれる。

●**新年会**は、1月28日(水)「熊」にて行います。

## お知らせ

★**神奈川学校図書館大交流会**/「学校図書館をどうつくるか~行政+市民+学校司書とともに~」平塚中学校区子ども読書活動推進協議会の報告&各地の情報交換/1/17(土)13:30~16:30/ひろつか市民活動センターAB会議室(JR平塚駅東口改札、南出口より歩2分 JAビルかながわ2F)/500円/直接会場へ/問:村島 ☎045-303-5096

★**第9回まちな男女平等フェスティバル**「一人ひとりが輝こう!」/2/1, 2(日,月)、まちな市民フォーラム全館/1日①12:15~②13:15~(申込不要)〔和室〕=**「おはなし会」**(まちな語り手の会)/1日14:30~16:15〔ホールで〕=**万葉集1250年紀講演会**「万葉集に見る古代の女と男」、講師:森朝男氏(フェリス学院大学名誉教授)/その他、フォーラム全館で2日間いろいろな催し有り。一度のぞいて見て下さい/申込:町田市コルセンター 042-724-5656

★12月16日、丸善(株)と(株)図書館流通センター(共に大日本印刷株式会社)が共同特殊会社を設立して経営統合すると発表。事業協力の具体的内容のトップに「図書館業務受託事業における丸善及びTRCのそれぞれの強みへの特化」を挙げっており、これからの指定管理者制度に大きく影響を及ぼす模様。

●**おとがき** 源氏物語1000年&紅葉狩りで賑う滋賀の石山寺を訪ね、永源寺の見事な紅葉を愛でて帰路、電車発車までの1時間を利用して、タクシーで近江八幡図書館を急遽見学。広々とした2Fの入口の特設コーナー「金原瑞人の世界-金原ひとみの作品も共に陳列」が目飛び込んでくる。駆け足で見て廻ったが、迷うことなく行き先が決まるのも、共通の話題を持つ4人の旅ならでのこと。(M<sup>+</sup>)